江戸日本の街道探訪　第１３回

中山道　山路を歩く

碓氷峠

* 中山道は、高崎宿を出立した後、高崎追分を左に曲がり、西へと方向を変える（一方は越後路）。碓氷川の北側を沿って進むと安中宿、それから９ｋｍで松井田宿。田園の中をどんどん行くと、新堀一里塚を過ぎ、横川村の庚申塔。そこを過ぎると碓氷関所が控えている。

碓氷関所

* この関所は中山道で最も厳しく、東海道の箱根関所ばりに「入り鉄砲出女」を取り締まった。関所は平安時代から在り、家康は中山道整備とともに、安中藩主井伊直勝を任命。常時、１９名の役人が詰める。石段を登ると厳めしい門。この東門は安中藩が管理。京都側の西門は、幕府直轄であり、通称、「天下門」と云われた。
* ■１．碓氷関所：石段を登ると東門が控えている
* 関所を通るとすぐに坂本宿がある。旅籠は最盛期４０軒。本陣２，脇本陣２。山間の細長い平地に中山道を挟んで密集して立っている。宿場を出る。上を潜り抜け､ちょっと行くと右側に碓氷峠への入り口がある。ここから中山道最大の難所と云われる碓氷峠登りが始まる。山の斜面を登る。すぐに関所破りを取り締まるための堂峰番所がある。それからどんどん行くと、難所の坂が登場。切り口鋭い石がごろごろある。江戸の旅人は草鞋履きでよくぞ登れたものだ。ようやく茶屋に着く。茶屋が４軒もある。弘法の井戸。旅人は命の水を呑む。ここからは登ってきた坂本宿が眼下に一望できる。絶景である。さらに南には碓氷湖がある。先を行こう。観音様と一里塚がある。その上は、赤土の急坂「座頭ころがし」である。馬頭観音を過ぎると山中茶屋に到達。その先、陣馬が原（戦国時代の合戦場跡）の追分（追分道は皇女和宮の専用道との）に出る。そこからかなり登ると、やっと見晴らしの良い頂上に到着する。熊野皇大神社（標高１２００ｍ）がある。なんと、日本武尊が板東平定から帰還する際、ここでを偲び、「我妻よ」と嘆いたという。ここまでなんと坂本宿から一気に７４０ｍ登りつめてきた。一転して頂上から下る道は緩やか。軽井沢宿に到着。
* 碓氷峠は関東と中部の境界。長野県と群馬県の県境。気候的にこの峠は、日本海と太平洋からの海風が交差する処。北と南とではまるで気候が異なる。それで碓氷峠は記憶に残ることになるのだ。

軽井沢宿

* 京都から見れば、軽井沢宿は碓氷峠の西の入り口にあたる。天明3年（１７８３）の浅間山の大噴火まで、この宿は、中山道で最も栄えている宿のひとつであった。本陣・脇本陣5軒、旅籠100軒弱もあった、といわれる。その当時、飯盛女が数百人働いていたそうな。江戸から行くと、碓氷峠を下って軽井沢宿の入り口に着く。そこに矢ヶ崎川が流れており、二手橋が架かっている。何とも美しい風情のある景色。京都からの旅人は、軽井沢宿に泊まり、ここから碓氷峠に登る。そこで､二手橋は、飯盛女との別れの場として知られることになる。天保14年（１８４３）、浅間山が大噴火。最も被害を受けた軽井沢宿は、復興後、旅籠21軒に縮小。以下、５ｋｍ間隔で、沓掛宿（現、中軽井沢）、追分宿と続く。しかし、この3宿は俗に「浅間三宿」と呼ばれ、栄えたのである。沓掛宿からは、草津温泉へ行く道がつながり、追分宿からは北国街道とつながっている。そうした、交通の便も寄与したに相違ない。追分宿は、「追分節」の発祥の地として知られ、元禄の頃には、旅籠屋が71軒もあったと記録されている。

和田宿、和田峠

* 追分宿から和田宿までの中山道は、両側に山が連なり、の細長い平野部を貫いていく感じである。この間、ほぼ５ｋｍの間隔で７つの宿場があって、最終的に和田宿に到達する。和田宿自体が、標高８２０ｍの高地にあり、和田峠の入り口にあたる、靜かなる山里の感。そして、この和田宿から、難関の和田峠を越え、下諏訪宿までの距離はなんと五里十八町（約２３ｋｍ）。難関の和田峠とは、正にこのことである。そこで和田宿側は、荷駄を運ぶ伝馬役が、最盛期70軒に達したという。和田宿の規模は天保年間で、本陣１，脇本陣２，旅籠28軒である。
* 和田宿を出て和田峠に向かう。和田峠を登り始めてまもなく休み茶屋がある。しばらく行くと石仏群が並ぶ。その先に再び接待茶屋がある。さらに行くと立派な石造りの常夜灯が立っている。そして、広原に出る。そこに一里塚。そして和田峠東餅茶屋で休憩する。和田峠の頂上まで一気に約７００ｍ登る。そして下ることになる。和田峠七曲りと呼ばれる急激なカーブ、急坂にガレ場、狭い道が続く。その先に避難所と荷置き場を兼ねた、大きな石小屋がある。さらにその先にもガレ場は続く。やっとのことで茶屋本陣に着く。和田峠が中山道最大の難所といわれるのは、このように京都側からの登りのことである。広重の雪の和田峠は京都側からの登りを描いている。急峻な山の景色である。江戸からの旅でこの峠を降りてしまえば、あとは平坦な道が下諏訪宿まで続く。宿の手前、右手を見ると、木落坂が見える。有名な諏訪大社の豪快な御柱祭りの現場である。まもなく諏訪湖の北に位置する諏訪大社下社春宮に着く。
* ■２．広重：雪の和田峠

下諏訪宿

* 下諏訪宿は諏訪大社下社の門前町として栄えた。旅籠数は45軒。ここは中山道唯一の温泉のある宿場である。広重の旅籠の絵にも木の温泉風呂に浸かっている旅人の姿が描かれている。また、下諏訪宿は江戸から来る、甲州街道の終点でもあり、交通量は多い。宿場本陣は岩波家が取り仕切り、和宮も宿泊した。

塩尻宿

* 下諏訪宿から3里北西に塩尻宿がある。つまり、諏訪湖から北西に登ったところ。塩尻宿は、塩の道、千石街道や伊那・飯田街道と繋がっており、交通量は多く、宿場も栄えた。宿場に着く手前に伊那街道との追分がある。左を見ると伊那街道である。追分を過ぎると、塩尻宿に入る。中山道の両側に、本陣１軒，脇本陣1軒、旅籠75軒が並ぶ。
* 宿場を出ると、駕籠立場がある。交通量の盛んなることを示している。さらにその先、田川にぶつかる。渡って西へどんどん行く。すると平出の一里塚がある。そこで今度は奈良井川に沿って、南に下っていく。すると本山宿。高札場を見て、宿場通過。南へどんどん下ると、日出塩一里塚に出る。するとの道を贄川宿に着く。ここからが木曽路である。

木曽路「木曽11宿」

* を旅する中山道のことを、江戸の人々は、俗に「木曽路」と称した。それは、木曽川に沿って木曽谷を行く過程が中山道最大の見せ場であったからである。そしてこの木曽路を繋ぐ宿場が「木曽11宿」である。宿、奈良井宿、藪原宿、宮ノ越宿、福島宿、上松宿、須原宿、野尻宿、宿、宿、宿。

宿

* 贄川宿は、木曽11宿の江戸側玄関に当たる。規模は、本陣1，脇本陣1，旅籠25軒。木曽路最初の宿場でもあり、此処には関所がある。関所は山の麓にでんと構えている。贄川は、古くは温泉があって熱川と云われていた。ところが温泉が枯れてしまい贄川になった。この宿は、中山道の左側に関所、宿場、著名な深沢家住宅の順に並ぶ。宿場のさらに左に、奈良井川が流れている。中山道はこの川沿いに南に下る。宿場を出ると右の山裾にトチの大木が見える。７ｋｍ歩くと奈良井宿。

奈良井宿

* 奈良井宿は、山里の宿場に関わらず大いに栄え、「奈良井千軒」と呼ばれた。宿場は、下町、中町、上町に分かれている。ここは、曲げ物、櫛、漆器などの木工業が盛んで、渓斎英泉の絵にも、旅立つ人々が木工みやげを買い、急峻な坂道を下っていく姿が描かれている。中山道は宿を出ると右へと山肌を縫っていく。どんどん行くと左に峰の茶屋があり、鳥居峠（標高１１９７ｍ）に着く。石畳道を降りると木曽川にぐんと近づき、そこに藪原宿がある。
* ■３．英泉：奈良井宿

薮原宿

* 藪原宿は、本陣1，脇本陣1，旅籠10軒の、比較的こじんまりした宿である。ここでは、旅人は、皆、名産の「お六櫛」を買った。英泉は、「薮原鳥居峠」と称して山の景色に見とれる旅人と薪を背負子で背負う、処の女を生き生きと描いている。
* ■４．英泉：薮原鳥居峠：どっこいしょと一服

宮ノ越宿

* 木曽川に沿って南へ下る。すると、木曾義仲ゆかりの宮ノ越宿につく。本陣1，脇本陣１，旅籠21軒。ここは木曾義仲挙兵の地であり、義仲の墓もある。旗挙八幡宮の境内には樹齢800年の欅が聳えている。さらに木曽川沿いの山道を８ｋｍ歩くと福島宿に着く。

福島宿

* 福島宿は、戦国時代、領主木曽氏の城下町であった。江戸時代には木曽代官山村氏の陣屋町で、宿場の江戸側入り口には福島関所がある。福島関所は日本四大関所の一つに数えられている。関所を取り仕切る管理者は、代官山村氏。
* ■５．福島関所

木曽の

* 中山道は木曽川に沿ってさらに南に下る。福島宿と次の上松宿の間に、木曽川の切り立つ崖沿いを渡る、有名な「木曽の」がある。桟とは、断崖にへばりつくように築かれた参道のこと。命がけの渡りである。中山道「木曽の桟、太田の渡し、碓氷峠がなけりゃよい」と云われた難所。芭蕉は「桟橋や命をからむ蔦葛」と詠んだ。応永14年（1407）、60間（１０９ｍ）の桟道敷設。険しい岩の間に丸太と板を組み込み、藤づるで結わえた造り。慶長元年（１６４８）中山道の整備にともない、尾張藩が875両を投資。56間（１０２ｍ）の石垣を築き、中央部に１４．５ｍの木橋を架ける。寛保（１７４１）と明治13年の二度の改修工事で、木橋下の空間は全て石積みとなった。
* ■６．木曽の桟。現在の写真。
* この後、木曽路は馬籠宿まで続く。